

山田彊一先生の芸術に対する思いからみた考察と今後の展望について

2022年8月2日

南山大学 人文学部人類文化学科 3年 川瀬麻実

1, 始めに

1-1 山田彊一先生

「山田彊一」先生は、妖怪博士こと現代美術作家エッセイストである。直接顔を合わせるまでは、山田先生についてプロフィールとブログからの情報で、一言で表せば、「ユニークで面白い人」というイメージをもった。実際に、お会いしたところ、ユニークという感情を感じさせないほど、自分自身の生き方や考えをしっかりと持ち、沢山の経験をされたからこそ、私たちには全く理解ができない程、私を凌駕する存在感であった。

1-2 質問事項のまとめ

そんな中、事前学習を通して、先生の著作である、「名古屋 妖怪三十六景」の先生オリジナル妖怪の「11 太郎メデューサ」(山田 2018)をみて疑問に思った。岡本先生をモチーフにした妖怪の描き方が、他の妖怪の妖怪に比べて非常に画家らしいタッチと描き方であり、何か意味があるのか、と思った。つまり、1つ目の疑問として、先生の「描き方の工夫」は何か、ということである。

2つ目の質問としては、幽霊と妖怪の相違点は何か、ということである。岡本太郎氏をモチーフにした妖怪をみて、人をモチーフにするのは、「幽霊」ではないのかということである。自分の中で幽霊と妖怪の違いが分からなかったので、先生自身の所感を聞くところとした。

2, 【1つ目の質問】先生の著作からみる芸術性とそれに対する考察

今回、「名古屋 妖怪三十六景」(山田 2018)を通して、先生の描く妖怪の理解はもちろん、先生の絵の描き方にも着目した。先生の描き方(年代によって描き方が変化しているが、著作が刊行された当時)は、基本的に、輪郭を細く取るが、岡本太郎氏の場合は、写真に忠実に従い鉛筆を用いたデッサン形式である。その事について、山田先生は、「岡本太郎氏が、絵は上手くあってはならない、きれいであってはいけない」とおっしゃった。そして、「芸術は、末期」とおっしゃった。そこから考察できることとして、とそこから、私は、山田先生が、「美術は創造だ」とおっしゃったことから、妖怪は完全オリジナルであることから、描き方も自由であり、それは、山田先生自身が感じた岡本太郎氏を絵に表現するために、最も近い像を描くために最適な技法がデッサンであり、特に特別な意味はなかったように思

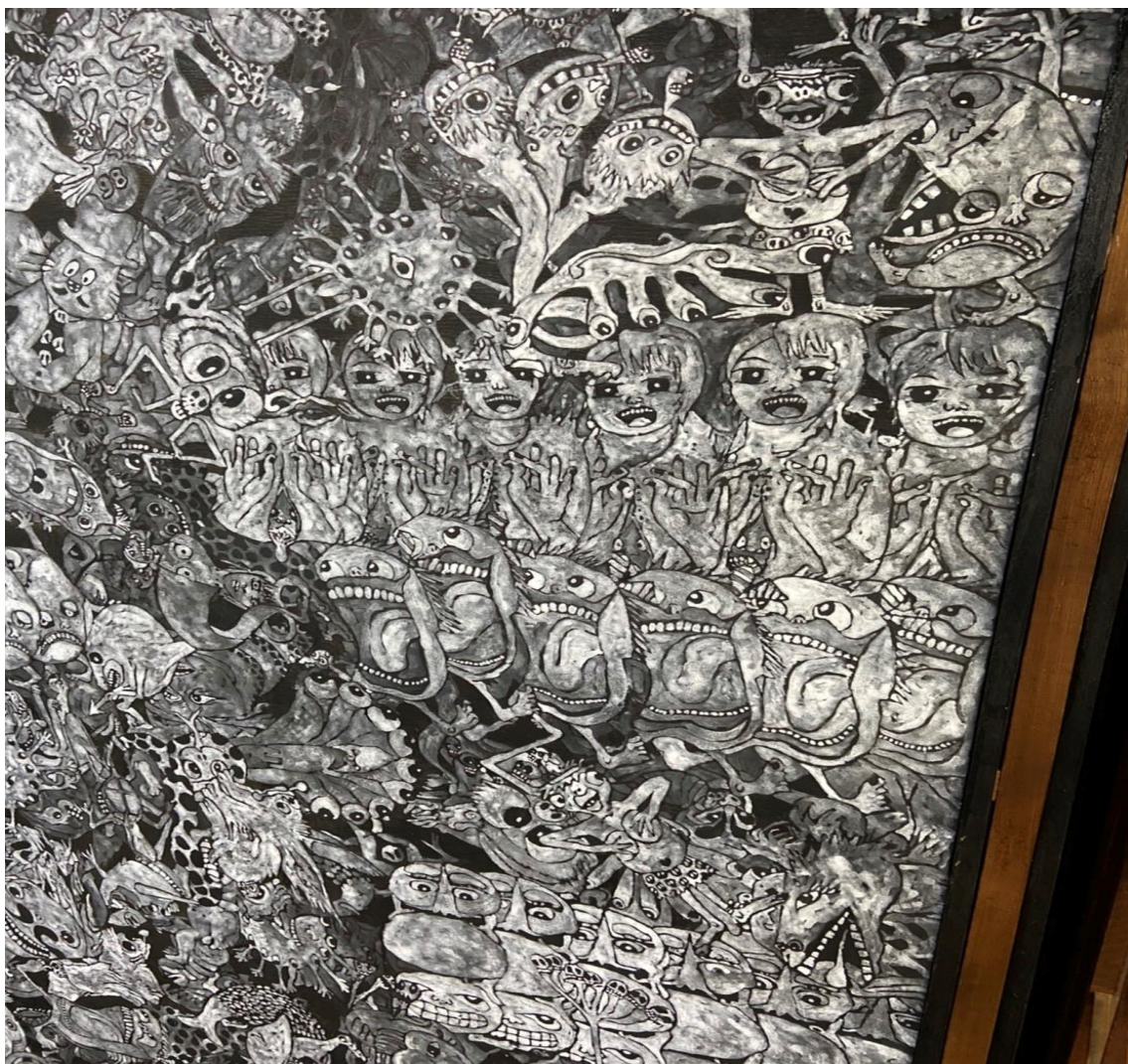
われる。なぜなら、妖怪が自由な発想から生まれたならば、描き方も必然的に自由に選択できるからだ。

さらに、先生自身が、名古屋人の特性（自由がないため妖怪が少ないという説）を少し自虐ネタにしている部分があるため、そういった意味で自由な描き方は、今の名古屋人の生きづらさと社会の風刺も含めているのではないか、と考えた。

3, 【2つ目の質問】幽霊と妖怪の違いについて

最初に、私が質問した意図と先生がくみ取った意味に齟齬があったことについて補足する。先生自身は、私の意図を繰り返し聞いて下さったが先生自身がお話されているうちに、先生の中の定義の違いを聞き出すことができなかった。しかし、先生から幽霊の日と妖怪の日についての言及があった。それは、7月26日が「幽霊の日」であることは有名であるが、8月8日が「妖怪の日」とされたのは、柳田国男が、遠野物語の中でその日を妖怪の日としたことがルーツさそうだ。また、その中で、先生自身は、8月8日が妖怪の日であることを初めて知って、名古屋観光とどうにか結び付けることはできないか、と考えたそうだ。私は、先程、先生が名古屋を自虐していることがある、といったが、先生自身が名古屋をPRしたいという気持ちがあるということに関して、妖怪と名古屋、そして名古屋の魅力アピールに繋がりたいという気持ちがある、ということが分かり、今回の妖怪イベントに繋がることである、と思った。

<写真>



↑

先生の描く絵は、白黒が多い。なぜなら、色を載せることで色が本質に勝ってしまいそのものの良さがなくなるからだそう。

<参考文献>

山田彊一 2018『名古屋 妖怪三十六景』「11 太郎メデューサ」 p.32